

水の恵みと土石流—静岡県富士市

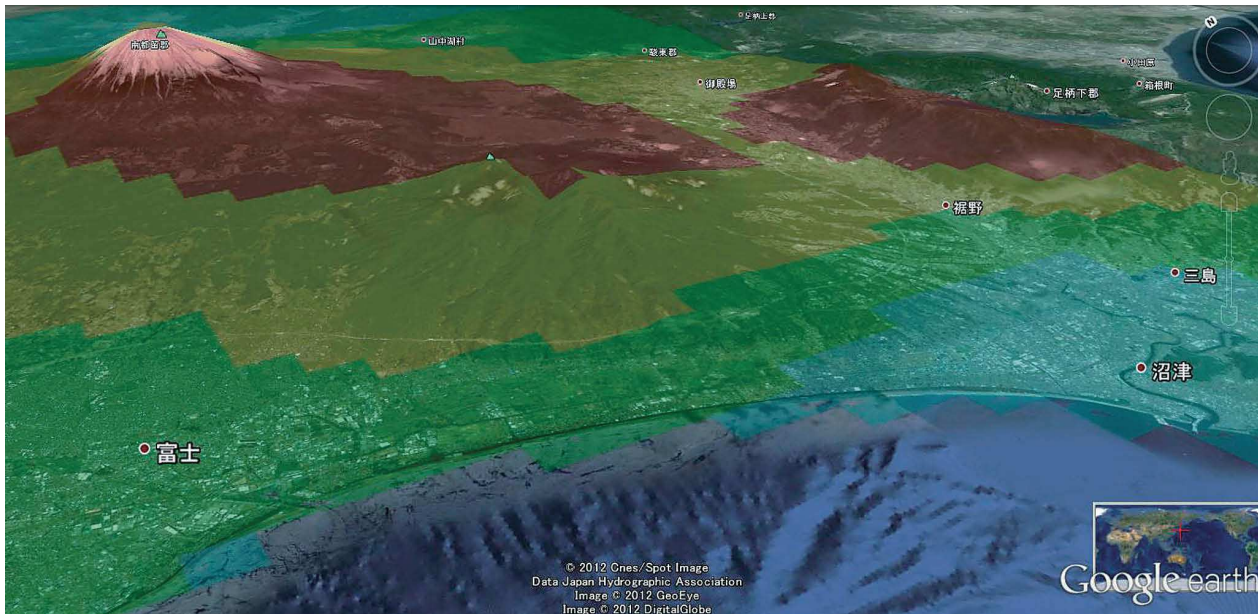


図1 富士山南麓の年間降水量

(水色：1,500～2,000mm，緑：2,000～2,500mm，
黄：2,500～3,000mm，赤：4,000mm以上)

国土数値情報「平年値メッシュ」より作成 <http://nlftp.mlit.go.jp/ksj/>

太平洋から北上するモンスーンは、駿河湾の奥で南アルプスから富士山、箱根を乗り越える際に大量の雨を降らせる。富士山南麓地域は、静岡県内でも特に雨が多い場所である。Google Earthに1 km メッシュを重ねて任意の地点をクリックすると、年間降水量がわかる(図1)。富士市の中心部が2,105 mm、沼津市の中心部が1,806 mmと、同じ沿岸部でも富士市の方が300 mmも多い。ちなみに、反対側の山梨県富士吉田市は年1,727 mmである。

沼津と富士をつなぐ街道沿いでは、豊富な水を生かした紙作りや製粉業が栄えてきた。地下水を生かした製紙業の集積を経て、現在は、規模を縮小させた工場の跡地を親水公園として整備するなど、水の恵みを生かした都市景観の再生が試みられている(写真1)。

水の恵みは、災害のリスクと隣り合わせでもある。愛鷹山^{あしたかやま}の中腹や、富士山の南麓の大部分は「土砂災害警戒斜面」に指定されている(図2)。世界に誇る高度な砂防工事技術で、土石流は上流で食い止められているが、潤井川^{うるいがわ}河口で続けられる浚渫^{しゅんせつ}作業と、掻き出された土砂を見れば、水の力を実感することができるだろう(写真2・3)。

昭和54年(1979年)4月から5月にかけて、融雪期に降った大雨で大規模な土石流が発生し、多くの被害を出した(写真4)。以来、大規模な土石流災害は発生していないが、ゲリラ豪雨の発生や、開発や林業の低迷による森林の保水能力の低下など、リスクは高まりつつあるかもしれない。

恵みはあって当たり前、災害はなくて当たり前ではない。普段何気なく見ている景色から自然のメカニズムを読み取り、自然に対する畏敬の念を持つ教育を行いたいものである。



図2 富士山南麓の土石流災害警戒斜面の分布
国土数値情報「土砂災害警戒斜面」より作成



写真1 工業用井戸から自噴する地下水
(富士市, 原田湧水公園)



写真2 港内に堆積した土砂を浚渫する専用船
(富士市, 田子ノ浦港)



写真3 積み上げられた浚渫土砂
(富士市, 田子ノ浦港)
後ろは新幹線の高架と富士山



写真4 土石流で壊れた橋(富士宮市内, 1979年
撮影, 国土交通省富士砂防事務所提供
静岡県総合防災センター「土石流の流出と山麓の暮らし」
<http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/sbosai/fuji/wakaru/004.html>

- KML ① <http://www.ninomiya-shoten.co.jp/kml/ictz/103/fig1.kml>
 ② <http://www.ninomiya-shoten.co.jp/kml/ictz/103/fig2.kml>